

EI 統計に見る、2024 年の国際エネルギー情勢（3）：主要国・地域動向

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
専務理事 首席研究員
小山 堅

小論「国際エネルギー情勢を見る目」の 748 号及び 749 号では、「EI Statistical Review of World Energy 2025」に基づいて、2024 年の国際エネルギー情勢についてエネルギー消費、エネルギー生産・輸出の動向を、主にエネルギー別の視点でその特徴をまとめてきた。今回は、2024 年の国際エネルギー情勢のポイントを、主要国・地域毎に整理する。取り上げる主要国・地域は、米国、EU、中国、インド、中東、ロシアの 6 つである。

米国は、国際政治・世界経済・軍事安全保障などの面で世界をリードする超大国であり、国際エネルギー情勢に対して極めて大きな影響力を有する。2024 年はその米国のリーダーを選ぶ大統領選挙が行われ、2025 年からの「トランプ 2.0」のスタートを準備する年となった。また、世界のエネルギー市場に対して米国のエネルギー需給そのものが多大な影響を及ぼす点も見逃せない。2024 年、米国の一次エネルギー消費は 91.8Exajoules（エクサジュール、10 の 18 乗ジュール、以下 EJ）で、世界の 16%のシェアを占めた。中国に次ぐ世界 2 位のエネルギー消費大国である。2024 年の一次エネルギー消費は前年比 0.4%の微増となったが、過去 10 年間、一次エネルギー消費はほぼ横ばいに近い状況が続いている。一次エネルギー消費の内訳は、石油 39%、天然ガス 35%、石炭 9%と、国内に豊富な資源を持つ石油・ガスを中心に化石燃料のシェアが 83%を占める。発電構成では、ガスが最大で 43%、次いで再エネと原子力が共に 18%、石炭が 15%となっている。

米国は、最大の国際貿易財である石油、それに次ぐ天然ガスにおいて、生産・消費双方で世界で抜kindでた存在である。米国の 2024 年の石油消費は 1,900 万 B/D で世界 1 位（シェア 19%）、石油生産も 2,014 万 B/D で世界 1 位（同 21%）である。ガスについても、消費は 902BCM（10 億立米）で世界 1 位（同 22%）、生産も 1,033BCM で世界 1 位（同 25%）である。2024 年は特に石油生産の伸びが 3.6%と堅調な増加を示した。生産増加に支えられ、米国の石油輸出は前年比 6.3%増の 988 万 B/D で世界 1 位（ただし石油輸入も 843 万 B/D を記録）、LNG 輸出は同 0.4%増の 115BCM で世界 1 位であった。2024 年も、国際エネルギー貿易における米国の重要性は大きく際立つ一年であった。

EU の一次エネルギー消費は、2022 年、2023 年と 2 年連続で減少したが、2024 年は前年比 0.3%増で 52.0EJ となった。世界シェアは 9%であり、地域としてのシェアは、中国、米国に次ぐ第 3 位である。しかし、経済の成熟化などもあり、EU のエネルギー消費は過去 10 年間、平均で 1.1%での減少傾向を示し、ピーク時（2006 年）の水準からは 22%の消費減となっている。2024 年の EU の一次エネルギー消費構成は、石油が 42%、ガス 22%、石炭 9%と、化石燃料合計で 73%であった。化石燃料のシェアは世界平均値（87%）より 14 ポイントも低く、EU のエネルギー構成の大きな特徴となっている。発電構成では、再エネが最大で 34%、次いで原子力 23%、ガス 15%、水力 13%、石炭 11%となっており、非化石電源（ゼロエミッション電源）のシェアが 70%を占めている。

EU の 2024 年エネルギー別消費を見ると、石油は前年比 0.7%増、ガス 1.6%増となり、前年の減少から反転した。他方、石炭は 12.1%減と大幅減少が続いている。脱ロシアの取組みによるガス消費の減少が踊り場的な状況となっている様子が窺える。他方、原子力お

よび再エネは着実な増加を示しているが、2024 年の再エネ全体（水力含む）の増加率 3.1% は過去 10 年平均（3.4%）よりも低くなった。ウクライナ危機に直面した EU の脱ロシアと脱炭素の取組みがややペースを落としている印象も受ける。

世界最大のエネルギー消費大国、中国の 2024 年の一次エネルギー消費は 158.9EJ で前年比 2.4%と世界平均を上回る堅調な伸びを示した（世界シェアは 27%）。中国のエネルギー需給構造では一次エネルギー消費に占める石炭のシェアが 2024 年 58%と圧倒的に高く、次いで石油 20%、ガスが 9%となっている。中国ではかつて 8 割近かった石炭のシェアが徐々に低下してきたが、いまだに石炭依存の需給構造に変わりはない。また発電構成においても石炭のシェアが 58%と圧倒的に高く、次いで伸長著しい再エネの 20%となっている。

エネルギー別には再エネの伸び率が 18.8%と極めて高かった。同時に最大のエネルギー源である石炭も前年比 1.4%で増加したことが注目される。エネルギー安全保障の観点から、国内に豊富に賦存し、価格競争力のある石炭の消費が伸びている。なお石炭については、消費・生産の拡大で 2024 年の中国の世界に占めるシェアは消費 56%、生産 52%と圧倒的な地位を占めている。また、再エネの世界シェアも 28%と、世界 1 位であり、拡大続く原子力と共に中国の存在感が際立っている。他方、2024 年の注目点として、中国の石油消費が前年比 1.2%減で、1,637 万 B/D となったことがある。景気減速と EV 躍進などが影響したものと見られるが、中国の石油消費前年割れは 1990 年以来で、重大な変化となった。

グローバルサウスの代表として、インドの国際エネルギー市場における存在感も高まっている。2024 年のインドの一次エネルギー消費は前年比 4.3%増の 38.8EJ となった。世界シェア 7%を占め、国別としては世界 3 位のエネルギー消費大国である。インドも中国と同じく石炭依存が高く 2024 年の一次エネルギー消費構成では石炭 59%、石油 28%、ガス 7%となっている。発電構成では石炭のシェアが 75%とさらに際立っている。2024 年において、インドでも再エネ増加率が 9.9%と高かったが、エネルギー安全保障の観点から、石炭が消費 3.7%増、生産 7.0%増と高い伸びを示した点も 2024 年のインドの特徴である。

世界のエネルギー供給の重心である中東では、2024 年には原油価格下支えのための OPEC プラスの減産の影響で、石油生産・輸出ともに前年比で減少となった。2024 年の中東の石油生産は、前年比 0.4%減の 3,012 万 B/D となった（世界シェア 31%）。この減産の中心となったのは OPEC の盟主、サウジアラビアであり、同国の石油生産は前年比 3.6%減の 1,086 万 B/D であった（同国の石油生産は、2022 年対比では 11%、128 万 B/D 減少）。世界の石油需要が微増となる中、米国を中心とした非 OPEC 増産に対応し、OPEC プラスの減産が持続していることが中東の石油生産低下につながっている。また、上記の生産動向の下、2024 年の中東の石油輸出も、前年比 0.9%減の 2,426 万 B/D となった。とはいえ、中東の石油輸出はシェア 35%を占め、地域として世界最大となっている。なお、中東の 2024 年 LNG 輸出は前年比 0.6%の微減で 124BCM となったが、地域別で見ると、アジア太平洋、北米を若干上回る世界最大の輸出地域の地位を占めた。

西側の経済制裁下にあるロシアのエネルギー生産・輸出について 2024 年に様々な動きが見られた。2024 年のロシアの石油生産は前年比 2.9%減の 1,075 万 B/D となったが石油輸出は前年比 3.3%増の 704 万 B/D となった。しかしその輸出はウクライナ戦争前の水準（781 万 B/D）を回復するには至っていない。他方、ロシアのガス生産は 2022 年以来の減少に歯止めが掛かり前年比 7.1%増の 630BCM となった。ガス輸出は、2024 年には前年比 22%増で 108BCM となったパイプライン輸出の動きが目を見く。輸出先としては、欧州・旧ソ連・中国向けがいずれも増加した。ただし、2024 年の輸出水準は 2021 年の輸出量（201BCM）には遠く及ばない。LNG も 2024 年も前年比 5.1%増で 44BCM となった。ロシアの石油・ガス輸出は、2023 年まで続いた減少傾向に歯止めが掛かる状況となったことが注目される。

以上